

國學院大學学術情報リポジトリ「K-RAIN」

化粧井戸伝説が映す信仰の世界：福島県の事例から

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學 公開日: 2024-12-17 キーワード (Ja): 女性伝説, 遊女 (飯盛女), 街道 (海道), 白の呪術, 無縁・境界性 キーワード (En): 作成者: 内藤, 浩誉, Naitoh, Hiroyo メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001294

化粧井戸伝説が映す信仰の世界

— 福島県の事例から —

内藤浩誉

一 はじめに

「石を投げれば当たる」という慣用句がある。多くの存在を認める譬えであるが、日本における伝説は、まさにこの表現がふさわしいほど豊富に見聞きできる。「日本民俗学の父」と称される柳田國男はこの学問を体系づけるにあたり、伝説に着目し多くの論考をまとめたが、中でも伝説の管理者や伝播者として漂泊民・芸能民の存在、信仰との関わり、川・海・泉・淵・池等水辺に多く点在する女性伝説の特異性などについて指摘した。

今回注目したいのは、重要なモチーフの一つとして挙げられる「井戸」である。全国各地で多種多様に語られる中、男女問わず偉人全般に見られる「産湯井」に対し、「化粧井」は女性の伝承として顕著に表れたり、「姿見」の意味を含むのも特徴である。全国に点在する「化粧井戸(清水)」伝説を概観すると、平安時代前中期の小野小町^①や和泉式部^②、平安末から鎌倉時代の静御前^③、巴御前^④、北条政子^⑤、虎御前^⑥など歴史や文学で馴染みある女性が主人公となる事例や、長者の娘^⑦にまつわる形で清水を使ったら眼病や皮膚病が治癒した、美肌になったという信仰が伴う事例が見られる。また、「化粧」と名づく伝承は他にも「化

粧岩「化粧坂」があるが、中には化粧井と坂の地名が複合する事例が見受けられる。

「けししょう（化粧／仮生）」には二つの意味がある。「身だしなみ」と、「精神・肉体を美化莊嚴にすることによる変成の完結」である。神に仕える女性は特定の水で化粧することで憑依状態となり異郷からのマレビト（来訪神）を欲待する、また新たな霊力を入れ神の威力を高める、と水辺での呪術や占い、祭祀での神迎えに結びつけて化粧の意義は説かれてきた。また、化粧井も同様で、神の嫁の禊として化粧清水があるなど、水辺での祭祀・芸能に関わる漂泊女性や巫女の面影、水神への人身御供の側面などが柳田國男・折口信夫をはじめとした先人たちによって読み解かれてきた。いわゆるハレの時と場に水を用いた呪術信仰を見出した指摘であり、その説は踏襲されている。

しかし個々の事例に向き合うと、化粧清水伝承の全てが従来指摘に当てはまるのか、その具体像や実態はどのようなものなのか、疑問も生じる。やはり各地域の様相に鑑み、伝承それぞれの特性を見極める必要があるのではないか。

現地採訪調査を重ねると、伝説には人々の生活文化や情景、心情が反映されていることに気づかされる。そしてそこに、伝説の存在意義を見据えることができる。なぜ伝説が生まれるの

か。伝説が何らかの意図を持つ人々によって語り継がれてきたのなら、どのように口の端に上ってきたのか。そして、物語を伴いながらあえて名づけ、特別視するのはなぜか。まことしやかに語られるに当たり、その話が説得力を増すのは、納得するだけの社会的・文化的・心理的背景や時代性・地域性という基盤があるからである。それら一つ一つを丁寧に見つめることは、生活者の実相を垣間見、「人間理解」に近づくことになる。

今回、福島県の「化粧井戸（清水）」事例を取り上げる。県内には、和泉式部（白河市）、小野小町（喜多方市）、遊女（三春町）が化粧したと伝わる井戸が点在する。なお井戸ではないが、静御前と関わる化粧坂（郡山市）もあり、他の都道府県と比べても、福島県では「化粧」伝承が著しいと言える。

「化粧井戸（清水）」伝承の背景にある歴史や文化を読み解きながら、人々にとつての話の意義や機能、「化粧」という名称に込められた意識や視点、受容の様相について捉えていきたい。

二 平安時代女流歌人の化粧清水伝承

まず、平安時代の女流歌人という共通点から、和泉式部と小野小町の事例を紹介する。

和泉式部の化粧井は、歌枕で有名な白河の関から約4キロ、白河市（旧西白河郡表郷村）表郷中野式部内境界にある。罹患した父に会うため奥州に向かう和泉式部であったが、兵乱により白河の関を通れず、逗留し様子を窺っていた。しかし事態が収まる気配がないので、「白河の関にこの身はとめぬれど心は君が里にこそ行く」の歌を残して京へ戻ることにし、持仏を安置したのが常宣寺（永祿二／一五五九年建立、寛永／一六二四—四三年間中興）の前身と伝わる。当寺は現在JR白河駅近辺へと移転しているが、庵のあった旧地の場所【写真A】は、和泉式部に因み「式部内」という字名が付き、三尊杉と、水神碑の横に化粧井が現存する。



【写真A】和泉式部庵跡の三尊杉と化粧井
〔福島県白河市表郷中野〕

藩主松平定信の命でまとめられた地誌『白河風土記』^①（文化二／一八〇五年）や、常宣寺所蔵の縁起^②に和泉式部伝説は紹介されているが、化粧井に注目すると、『白河風土記』には記載がない一方、「常宣寺本尊縁起撮写」（元禄七／一六九四年の漢文体縁起、文化十／一八一三年「本尊縁起画図詞書」）では地名由来や関伽水としての使用を述べる。



【写真B】和泉式部守本尊〔福島県白河市向新蔵〕

しかしこの井戸は現在、何らかの意味を以て営まれている様子は窺えない。偶然地元に住居する人と話をする機会があったので尋ねてみると、そもそも井戸の存在すら認識していなかった。いまや和泉式部の化粧井はただ鬱蒼とした林の中にひっそりと郷土史の一端として存在するだけのようだ。ちなみに、和泉式部所持の守本尊【写真B】は常宣寺に安置され、今も大切にされている。

続いて、喜多方市高郷町（旧耶麻郡高郷村）峯利田の小野小町伝承について紹介する。会津盆地西側山地の当地は、利田村の西、松原利田の外れに位置する。この一帯は近年に至るまで基盤整備がなく、集落の風景は変わらないという。会津と越後を結ぶ主要道の一つ、旧越後街道沿いに小野塚が二基（中世期の宝篋印塔と昭和五三（一九七八）年に再建された五輪塔）、一字一石の小石が積まれた上に立つ【写真C】。旅をして当地まで来たが亡くなった小野小町の墓と伝わる。越後街道には、多くの旅人が往来した。小野塚辺りは木陰と清水があり、旅人にとって休憩地にふさわしく、情報交換の場でもあったことは想像に難くない。と同時に、休みがてら旅の安全を祈願し、小野塚に手を合わせた旅人も多かったであろう。この小野塚は、小野小町に仮託して旅での死者を供養したものであったかもしれない。小町はいわば旅人の象徴であり、人々から畏敬されていた様子は、当地での捉えられ方にも窺える。

この小町伝承は、寛文六（一六六六）年藩主保科正之の命で編纂された地誌『新編会津風土記』^[12]に記載があるが、その約百年後の宝暦六（一七五六）年、「小町塚の語り伝えを残したい」と依頼された僧が在地伝承を基に縁起^[13]を著述した。その概要は、次のようなものである。

年老いた小野小町が都から生まれ故郷へ赴く途中、この地で一夜の宿を乞うた。すると、その家の農夫は人夫として都へ上った折に小町の屋敷で勤めていたことがあり、久々の再会を喜んだ。長旅の疲れで病に罹った小町はこの地で亡くなったため、村人は塚を築いて弔った。小町が春に詠んだという歌「陸奥のうどの桜と人間はば会津のそととふもて（田面）の里」が伝わる。

小町塚から徒歩数分の畑地に「小町化粧の井戸」はあるのだが、地誌や縁起にこの記載はない。現在案内板で解説される小町が化粧をしたという話自体は、おそらく比較的新しい時代に知識や情報に基づき作られた話なのではないか。実際話を伺うと、元来「化粧の井戸」という言い方はせず、「小町の（所の）湧き水」^[14]と呼んでいたり、畑仕事をしていた地元的女性は「小町の手洗い水」と言っていた。ただ、人々は「小町様」と大切にしていたようで、農作業の合間に喉を潤したり、生活水として活用していたという。今は整備されているが【写真D】、元は崖の岩肌から豊かに染み出る清水だったという。昭和中期まで、このような湧泉は辺りに多数あった。昨今は水脈の変化で特定な場所から出にくくなったことだが、小町の水は今も同じ場所から湧いている。それでも案内をしてくださったY・



【写真C】越後街道沿いの小町塚〔福島県喜多方市高郷町〕



【写真C】小野塚下の一字一石



【写真D】 小野小町の化粧井戸
〔福島県喜多方市高郷町〕

F氏から聞くとここでは、本年（令和六／二〇二四年）は暖冬による雪不足の影響で、水量が少ないという。生活風景も、伝説を語る上で説得力に繋がる。環境変化による伝説事物の消失は会話上の減少を招き、やがて物語の記憶が遠のく可能性が高くなる。今後人々は、どのようにこの清水を認識していくのだろうか。

峯利田の自然景観を詠み込んだ「利田八景」（読み人も年代も不明）には、小町塚にあった八重桜を活写した歌「小野小町

花の色末世に残す八重桜幾世久しき松原の里」がある。縁起の歌同様、小町と桜を結びつける印象が見て取れる。

小町に桜を詠ませる意味を考えるにあたり、「かがた」という地名に目を向けた。「腰を屈め農作業をする」、山に遮られる地形「影田・陰田」に由来する「かが」という音が特徴であるが、寛文年間（一六六一—一七二）には「利田」という表記が確認できることを筆頭に、「利田・加賀田・加々田」と寿ぎの印象を与える漢字表記への転換が見える。日陰は、作物の生育に不利である。山が迫り耕地が狭い場所では、冷夏になれば一層厳しさが増すであろう。

そうした事情を踏まえ小町が詠んだという歌を振り返ると、豊かな実りを希求する切実な心情が汲み取れまいか。縁起の「独活うどの桜」とは独特な表現であるが、白く小さい花をたくさんつける独活の花は細かな米粒の集合体のようであり、形は最盛期に雪洞ホシガのように咲き誇る桜の姿が重なる。稲魂いなたまが宿るとされる桜は豊作を占うことで知られるが、そこに蠢うごき（生土）を想起させる独活の生命力が加わる。また「田面たのめ」という地名も、田の表面全体に光を反射し白く輝く光景が思い浮かび、神々しさが連想できる。知識層の手による縁起とはいえ基本部分は地元ちもとの口承であり、民の心情や感情が反映されていると推察できる。

小町塚近くの清水を「化粧井戸」と語り始めたのがいつからなのか具体的には不明だが、このような話が生成される過程には、小町に引き寄せ「化粧」という名に委ねながら「白」の要素を盛り込み、その神聖さに生産性の高まりを期待し安寧を望む民の願いが垣間見えるのではないか。

三 三春町の化粧清水

福島県田村郡三春町には化粧井が二か所あり、いずれも遊女との関与が窺える。三春城内に入る街道は複数あるが、境界にあたる街道口の六ヶ所―八幡町末、荒町末、北町末、清水、新町末、馬場木戸外―には、道案内としての地藏が立っていた。

この六地藏は正徳五（一七一五）年、紫雲寺住職が建立願を出して許可されたものである。そのうち岩城街道の新町末、江戸街道の八幡町末の二か所に井戸があり、旅人が城内に入る前に身を整えたと伝わる。

三春は小さな町ながら経済的に活況し、遊興地としても発達した。その背景には、坂上田村麻呂東征伝承でも語られる三春駒の産地であることが大きい。競り市には県内外から多くの人や物資が集散し、その往来を支えたのが複数の街道や鉄道で

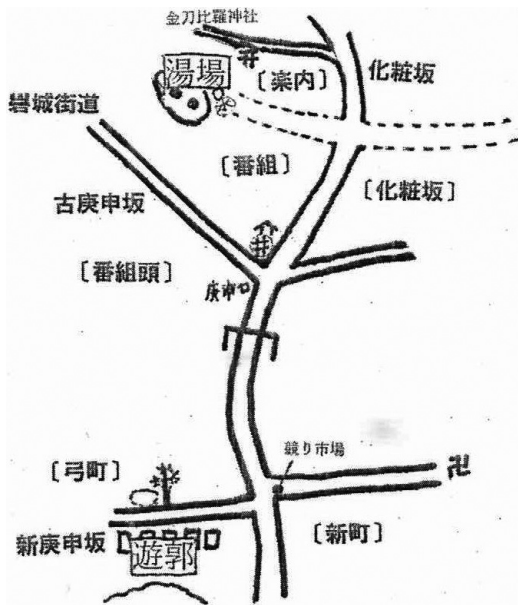
あった。岩代と岩城を結ぶ旧岩城街道は重要な道で、街道口の急坂は「化粧坂」⁽¹⁷⁾と名づけられ、途中で金毘羅神社内にある庚申様に行く道「庚申坂」と合流するその地点（庚申口）、字番組頭と字番組の境界に、一つ目の化粧井がある。現存するのは整備された掘り抜き井戸だが、元は滾々と湧く清水であったという。平成二三（二〇一一）年の東日本大震災以降は禁止されたが、飲水や煮炊き、野菜の洗水などにこの水を使用したこともあったという。岩城街道を往来する旅人が喉の渴きを癒したことが想像できる。

この庚申坂界隈に最初の遊郭が誕生した。⁽¹⁸⁾文政九（一八二六）年、橋普請に伴いこの場所を掘ったところ偶然温泉が湧いたので、藩の許可を得て湯小屋が建てられた。当初は庶民の湯場に過ぎず風俗の取り締まりが厳しかったが、次第に宿泊や会合に利用され、飯盛女も住むようになり、馬競り市や賭場で稼いだ馬喰や商人の遊蕩場になっていった。さらに明治になると禁制が解かれ、湯場は遊郭として位置づけられると、三春城外ながら益々この界限は活性化した。案内の遊郭は明治二九（一八九六）年に徒歩十五分程の弓町へ移転するが、馴染みある庚申坂の名称も引き継がれ、案内は「旧庚申坂」、弓町（新地遊郭）は「新庚申坂」と呼ばれるようになった⁽¹⁹⁾・新旧の



【写真E】化粧坂と庚申坂の合流点（庚申口）にある岩城街道の化粧井

庚申坂界限」。最も栄えたのは、磐越東線開通の大正三（一九一四）年頃だが、昭和三一（一九五六）年の「売春防止法」公布により遊郭廃止に至ると、廓は下宿屋に変わった。案内は在郷（近隣農村）として位置づけられるものの、町と



【図・新旧の庚申坂界限】

の境界地帯にあたる。今は住宅地に変貌しかつての面影は皆無であるが、岩城街道に面した谷間の窄まった地形に遊郭は並び、その前に湧き水が作る溜水と、周辺には賭博場があった。曾祖父(明治四五/一九一二年頃没)が遊郭によく出入りしていたという男性は、この清水で洗顔や白粉を使う遊女を見たという話を伝え聞いている。白粉の使用実態が、水辺の名称に結びつく認知や根拠になることが推し量れる。

一方、諸職人が住む八幡町の黒門外、江戸街道口に「踊り場」と呼ばれる場所があり、その近くにかつてもう一つの化粧井が存在したという。平成初期の道路改修によって無くなったものの、八幡神社裏の山の水が流れ込み滾々と湧く清水だったそうで、ここでも江戸街道から城下に入る際、飲水や身支度に使用したと伝わる。八幡町で髪結いをしていた元遊女は、白粉を溶かすためにこの清水を汲んで使った、それゆえ「化粧井戸」と呼んでいた、と話していたという。この井戸が町内で「化粧井」として幅広く認知されていたか窺うと庚申坂ほどではなさそうだが、日常での関与や関心から化粧と結びつけて呼ぶ人もいたと分かる。

化粧井界隈の案内ないし八幡町末は、三春城下と農村の境界地帯という点で共通する。鑑みるに、化粧井は身づくろいだけ

でなく、生死の分かれ目の境遇に置かれた人々にとつても意味をなす場であったのではあるまいか。すなわち、この空間や境界性は、清め、あるいは慰霊鎮魂するに相応しい場として認識されていたと考えられる。

新町に、昭進堂という和菓子店がある。馬喰が饅頭を求め繁盛したという。店横の通りは「せり場」と呼ばれ、かつて競り市場だった。市場は三春町内で度々移動しているが、新町のこの場所には幕末から明治初期に移動してきたという。春は馬、秋は繭を売る競りが数週間ずつ行われ、相場が良い当地は大層な賑わいだったそうである。そのため、近隣には民宿が二百軒ほど立ち並んだ。

三百年の歴史、東北一と称された「三春の盆踊り」の最盛期大正年間には、遊郭が盛況だった時期と重なる。踊り場には櫓が建ち、各町内では盆期間の後も盛大に催された。新町の「せり場」だけでなく、最も大がかりだったという八幡町末の「踊り場」、遊郭前の「馬つなぎ」と呼ばれた広場でも賑わい、さらにかつて競り市が立った化粧坂の広場も踊り場と考えられている。新地では遊郭だけの盆踊りがされ、二階の廊下軒に提灯を吊るし、軽快な太鼓に合わせて唄い、多くの踊り手が集まった。また新地の遊女は近隣の新町だけでなく、八幡町の盆踊りにも

行つたという。盆踊りに限らず、祭りや消防団の出初式などの催しがあると、遊女は店から一重の着物や浴衣を新調してもらえた。美しく装った姿で出かけては客を店へと誘ういわば営業活動であつたが、盆踊りでは一緒に踊って盛り上げた。盆踊り唄の歌詞は即興的に作ることが多く、音頭取りと踊り子の掛け合いにもなつた。男女の出会いの場であつたことを考えると、踊り場の化粧井は、飲水だけでなく身繕いで使用した可能性が示唆でき、ここにも「化粧井」と認知される理由を推察できる。

娯楽性と経済性を伴った交流の場として位置づけられるものの、元来念仏踊りに由来する「踊り場」は、信仰的な場、空間的に死者の魂を供養し、葬送する境界と見て取れる。そこで改めて、八幡町末の踊り場の特殊性に注目したい。

黒門外には非人の居住区があつたが、この辺りは天明の大飢饉の際に領内の避難民を受け入れ、炊き出し（施粥^{シカク}）をする御助小屋が設けられた場所でもあり、近くに踊り場や化粧井が位置した。小屋の設定場所の選定が偶然だつたとしても、結果として、生きるか死ぬかの瀬戸際に置かれた、あるいはそこに関わる人々にとつて、生者と死者が混在する踊り場付近は、此岸と彼岸を意識する空間になつたであろう。生から死へ、時には死から生へと甦る日常と非日常の狭間で、切実な心境にあつた

ことは想像に難くない。粥を作るのに必要な水場として利用されたであろう化粧井は、生きる上での力水であり、その清浄さが神聖で尊いものとして受容されたのではないか。

清水を使う身支度は、物理的に身を清めるだけでなく、日常と非日常の往来あるいは境界の超越に際し、精神的かつ信仰的に聖俗の切り替えを促すことは、祭礼での仮装・化身による変身のみならず、出産時の産湯、死に際の湯灌や死化粧を見ても理解できる。事物に「化粧」の呼称を付与する意味には、身繕いの主体が誰か（女性や遊女）に加え、水を取り化粧を施す目的としての境界の超越、聖俗の転換、安寧の獲得が反映されていると考えられる。

なお、敗死した英雄の首実検をしたと伝わる「首洗いの井戸」がある。これも一種の化粧井と言えるが、あえて「首洗い」と名付けるのは、英雄（男性）にまつわる事跡であるからだろうか。ならばこそ、「化粧」は女性や遊女の象徴として受け止められてきたと捉えられる。八幡町末の化粧井の事例でいえば、非常事態において当時の遊女がどのような役割を付託されたかは不明だが、遊女を彷彿とさせる化粧（白粉）を冠する井戸、踊り場での盆踊りへの積極的な関与に照らすと、後述する「無縁」に表れる遊女の境界性に留意する必要があるだろう。

四 三春で聞いた近代遊女の話

時代により特性の変遷があるとはいえ、遊女の歴史は古く、その存在が社会的・文化的に果たした役割から目を逸らすことはできない。故に、遊女の本質に関しては学術、殊に伝承研究においても大切なテーマの一つとして関心が寄せられてきた。

しかし今や、遊郭や遊女の実相を直接確認することはできない。近世から近代の遊女は実質的に人身売買の側面があり、人権の保護と尊重の観点から制度が廃止され、当事者から話を聞くことはほぼ皆無だからである。しかし今回この三春で、日常の中で遊郭関係者と会話を重ね、間接的にその様子を知る方々（それぞれ昭和三十年代後半／一九六〇年代生まれ）からお話を伺う機会に恵まれた。近代とはいえ遊女の実相を捉えることは、彼女たちがもたらした文化的意義を考えるヒントになろう。ここでは、歴史の彼方に追われつつある遊女たちの記憶を追跡する。

三春遊郭【写真F】は、案内から弓町（新地）に移った明治から大正にかけて最も繁盛した。花楼（屋号花屋）・島楼（屋号島屋）・二葉楼・島村楼・宮城楼の五軒には、番頭、遣り手、



【写真F】新地遊郭の跡地〔福島県三春町弓町〕

芸（半玉）、仲居、お抱えの髪結いだけでなく、最盛期には三十名を超える娼妓（遊女）が在籍し、昼夜問わず客たちの寝食をもてなした。特に娼妓は時に性的な接待も行ったが、本義は給仕であった点を見れば「飯盛女」という表現もできるが、ここでは「遊女」という名称で統一する。

案内には金刀比羅神社【写真G】と熊野神社が鎮座するが、遊女たちの信仰の痕跡が残るのは金刀比羅神社である。この近辺への外出は許されていたため、遊郭移転前の案内時代だけでなく、新地に移ってから裏道から庚申坂の畑道を通り、遊女たちはよく参詣していた。金毘羅神社隣には拝み屋をしていた修験者が暮らす堂（現在は個人宅敷地）があり、こちらでも病気の予防や治癒の祈禱をお願いしたという。社内には、字名や遊郭名などから遊女と思しき願主が奉納した絵馬が複数残されている^{②③}。天狗や宝剣、鳥居、「め」などの絵柄は、それぞれ邪気払い、災厄の断絶、病氣平癒など現世利益を求めるものだが、年季明け祈願も含まれていたことは想像に難くない。さらに特徴的なのが、繭玉を一つずつ繋げた繭数珠である。繭は解けば売り物になり、客から縁起物だと貰ったのであろう。遊女が願掛けや賽銭替わりに奉納した提げものが、今でも残る【写真H】。新地に遊女のための定期健診所（通称…病院）ができる



【写真G】金刀比羅神社〔福島県三春町字案内〕



【写真H】 金刀比羅神社に奉納された繭数珠

病気は改善されたというものの、いくつか民間信仰に頼る姿も窺える。遊女が恐れた病が、梅毒に代表される感染症⁽²⁾である。三春では梅毒によるできものに限らず「瘡」(瘡蓋・おでき)のことを「くさつぽ」と呼ぶ。「くさつぽ」ができた時、床屋の元遊女が患部に白粉をはたいてくれた体験談も聞かれた。白粉の歴史を繙くと、江戸時代には梅毒の特効薬として珍重されていたともいう。瘡に白粉が使われていた実例は、薬としての白粉の位置づけをも窺えよう。

遊郭は、旦那衆が集まり、町の運営などについて話しながら遊ぶ場所であった。庚申坂遊郭は酒が出るだけでなく、音曲を伴う宴会が開かれた。町内には庚申坂以外にも複数の遊興場が現れたが、「芸ができる新地は格上」と評する人もいたという。遊女自身、遊郭で身に着けた技芸が年季明け後の自立した生活に繋がることは少なくなかった。踊りや唄の師匠として生計を立てる者もいれば、髪結いや小料理屋を営んだり、中には女学校で礼儀作法を教える者もいた。

彼女たちは、身元保証のもと売られてきた。新潟や山形の農家の娘が多かったようだ。背景にあるのは冷害がもたらす不作で、「一家、心中するか、生きるために娘を売るか」という究極の選択に追い込まれた末の決断であった。「遊郭に来ていなけ

れば殺されていた」と口にする元遊女もいたという。子供を殺すよりもまし、と苦惱したであろう親心に思いを馳せると、複雑な心境になる。借金を背負い、歯を食いしばり懸命に生きる中で、技芸を習得し、何とか生き延びようとする遊女たちの心中は計り知れない。彼女たちの尊厳は、どこまで守られたであろうか。

少女一人を金銭換算した額がいくらなのかは分かりかねるが、年季は二十代半ばで明けることが多かったようだ。その後は故郷に帰る者もいれば、幼い頃に離れた故郷ではなく三春に留まり、見染められ妾になる者、所帯を持ち子供が授かる者もいた。先述の通り技芸で身を立てる者もいれば、前妻の子供たちを立派に育て上げた、入れ込んだ遊女が病気になるたので旦那が引き取って妻にした、という美談もある。しかし円満身請けがある一方、入り浸りになり破産した男がいたり、心中や駆け落ち、元遊女を後妻に迎えるために前妻が家を出されたという話もある。好むと好まざるとに関わらず遊女たちは噂の的となり、ヒソヒソ話の内それぞれのエピソードが知る人ぞ知るように広まるのであった。

遊女に対して、人々はどうのような印象を持っていたのだろうか。その一端を窺える話が、「妖怪花魁さま」である。禿を連

れた花魁さまがふわふわとやってくる。見とれてついていくと、ドブや肥溜めに落ちたりする。一緒に楽しく過ごして起きたら、とんでもない所で寝ていた、というものだ。世間話「狐に化かされた話」に似た内容だが、まさに狐は遊女を指している。また盆踊り唄⁽²³⁾にも、遊女の面影を窺わせる一節がある。

「三春盆踊り」

へサンヤーわたしや三春町 五万石育ち サンヤーお国自慢の
アラホンニナー 盆踊り へ奥州三春に 庚申坂なけりや 旅の
馬喰も 金残す へ月の明かりに 山路を越えて 歌で三春に
駒買いに へ三春庚申坂 七色狐 わたしも二〜三度 だまされ
れた へ奥州三春の 梅桃桜 咲いてあなたの 胸に散る

「庚申坂節（通称：ばかたら恋節）」

へハーお客せかるな また夜は 夜中 月は廊下の 屋根の上
バカタラコイコイ へ可愛いあいの娘は あこの山辺に こがる
る私は このつとめ バカタラコイコイ

儲けた金を隣りに使ってしまう馬喰を槍玉に挙げる一節や、遊女に入れあげる男性は七変化の狐（七色狐）に騙されているとする譬えは、現実を捉えた風刺であろう。遊女に惑わされる様子に対し、家庭の女性たちのもどかしさと本音が滲んでいるのではないか。

遊郭の記憶は、ある年代以上なら話に聞いているというが、現在ではあまり知られていない。大正時代の遊女の証文等資料も、関係者が健在なうちは収集に至らず、やがて焼かれて無くなった。同様に、遊郭に関する記述が町史で限られているのも、文字として残す差し障りと配慮があった可能性は否めない。そのため、実相を捉えようとすれば、生活上での伝聞に頼らざるを得なくなる。しかしそこには、「話せること、話せないこと、話したくないこと」、すなわち遊女に差す光と影は、「語れない、語らせない」タブー視の空気を纏うのである。

ある遊郭の女将(明治四十／一九〇七年頃生まれ)はこう語ったそうである。「遊女たちを無事次の人生に送り出したいという気概で、働かせながら技芸を教えた」と。独立できない元遊女には、遊郭内の仕事を依頼することもあったという。そうした遊郭なりの自負がある一方、恥ずかしさや後ろめたさを抱えていた様子も察せられた。実際、遊郭当事者の口も重たかった。噂されることへの抵抗があり、聞く方も、触れてはいけない内容はある本音と建て前は、文字や言葉だけでは探れない。

借金返済のため遊女が担った一つに性的な従事があり、意図しない妊娠、死に至る病気に見舞われることもあった。かつて

遊郭の前に池があり、身籠った遊女が身を冷水に浸し墮胎したという。また、遊郭裏山の畑の端には、ひっそりと並ぶ小さな石があった。遊女の墓だと聞いたが、容易に近づいてはいけない、と釘を刺されたそうである。全ての遊女が無事第二の人生に踏み込めたわけではない。生死の境に立たされた彼女たちの心情は、言葉に尽くしがたいものであったと思われる。

町の活性化を図るため街道筋に飯盛女が置かれた歴史は、三春に限った話ではない。宿場は、身分差を越え、体制や権力から弾かれた周縁の人々を含む多くの往来者や逗留者のエネルギーが集約する場である。他方、人身売買された上、過酷な労働を強いられた遊女たちによって経営は成り立ち、経済発展はもたらされた。

時代変遷はあれど、遊女は道も人も交差する場所で、技芸でもてなし、歌を交わし、時に情を交わした特徴が共通する。同時に、遊女の社交性、文芸性の意義は特記すべきことである。とはいえ、社会的には陰に置かれがちな存在ともいえる。そのような遊女に光を当てることは、様々な状況下においても懸命に生きる人々の実情と心情に目を向けることに繋がる。女性の「生(生殖)・性(性愛)・聖(神聖)の三位一体」は、民俗文化や伝承を支える重要な視座であり、歴史に貫かれた普遍性を

見つめることは、女性の本質や特性、多方面で果たされてきた役割を改めて捉え直すことにもなるだろう。

人道上、遊郭という制度は過去のものになった。しかし現代でも、経済的困窮者を取り巻く環境の厳しさ、格差の問題は根深く、特に社会構造の中で女性の問題はさらに課題が山積している。過去との対話を通じ、現代に照射して見えることと向き合いたい。

五 おわりに

化粧は、紅の「赤」、お歯黒や眉墨の「黒」、白粉の「白」に代表される。中でも、日本では歴史的に白い肌に対する美意識に基づく表現があり、時代によっては特権階級、高貴な身分の証として男女問わず白粉(おしろい/しろいもの)を用いてきた。

化粧井伝承は、白粉や水など「白」と紐づけた印象が強調され、境界が意識される道に位置するという共通性が窺え、さらそこには越境に関わる信仰的意義が見えてきた。

網野善彦氏は、神仏の世界であり冥府と俗界の境界領域に当たる河原・浜・坂は、しばしば葬地、交易のための市が立つ場、芸能や歌垣が行われる場になり、そこには聖なる世界に繋がる

存在があると説いた。そして、世俗から縁が切れ遍歴し、市や街道などで交易あるいは芸能活動に従事する日本中世社会の職能民の境界性を、「公界」「無縁」と表現した。化粧井伝承も、この「無縁」の觀念の延長上に存在すると見なせよう。

さらに通底するのが、生産や脱皮新生の象徴「白」の呪術である。雪や流水、白波や光を受けて輝く水面など、水自体も白で表現される。また、化粧で用いる白粉は水に溶かし使用することから、水との親和性が高い。清浄な白に対する神聖視が、白粉や水を通してそれらを扱う女性もまた、儀礼に関与するのに相応しいと見なされたと考える。殊に白粉を身近に置く遊女は、境界性が意識され、象徴性や役割として呪術的信仰に結ばれる傾向にあることも指摘しておきたい。

最後に、今後の調査研究の懸念を述べたい。昨今、民俗調査の肝となる現地探訪の実施にあたり、不安や躊躇、困難を感じずにはいられない。伝承の希薄化による話者の減少、環境や景観の変化による伝承の見出しにくさ、感染症の流行による人間同士の交流機会の減少、熊など野生動物との遭遇危機、交通インフラの後退等々、取り巻く環境の変化が伝説の自立を難しくしたり、調査機会の喪失を懸念することが増えている。一方現地を歩くと、様々な実感と気づきを得る。伝承から窺える社会

課題は、決して他人事にしてはいけないもの、将来を見据える羅針盤として多くを思考する機会となる。例えば今回の調査では、冷害がもたらす苦難に思いを寄せた。翻って「令和の米騒動」を引き起こした地球沸騰化現象による不作の懸念や、紛争を引き起こす水問題に目を向けると、世界的な環境問題の深刻さが現実や未来を脅かすものとして迫り、喫緊の課題として対処の必要性を痛感させる。

伝説の生成かつ伝達継承は、三つの動き(シジョン)、すなわち「想像(イマジネーション)」「創造(クリエーション)」「交流(コミュニケーション)」に支えられる。日常風景は時に記録に残りにくく、記憶から遠ざかれれば消えてしまい、伝承の実態や具体的確証に辿り着きにくいこともある。しかし生活する限り伝承は生まれ、人々の心に響く。現地に立つと、顔も名前も知らないけれど確かにそこに実在した人々の、声なき声が呼び掛けてくることがある。歴史を繙き対話する中で、民衆の心をどれだけ掬い上げることができるのか。変化する時代の中に見出す心意や普遍性を、物語化かつ伝承されてきた伝説から汲み取り、人々の祈りの姿を受け止め続けることが、課題を乗り越える英知を引き出すのではないか。それこそが、「楽しむ」だけではない文芸研究の醍醐味であると思う。

【注】

- (1) 平安時代前期の歌人。実在の事績は『古今和歌集』所収の歌以外にないが、絶世の美女ながら異性を拒否し、孤独な老女として落魄する物語が語られる。化粧井の事例は、宮城県大崎市、神奈川県厚木市、都府京都市、鳥取県岸本町などに点在する。
- (2) 平安時代中期の歌人。恋愛遍歴の後、一条天皇中宮彰子に仕え、藤原保昌との再婚で丹後に下る。
- (3) 平安時代末期の芸能者。源義経の愛妾。化粧井の事例が奈良県吉野町(化粧岩も)、兵庫県尼崎市、香川県東かがわ市にある。福島県郡山市には、旅の供小六が亡くなり涙を流したため化粧を直した、という化粧坂が伝わる。
- (4) 平安時代末期の女武者。木曾義仲の愛妾、源平合戦後は和田義盛の妻になった説、大力伝承が伝わる。化粧井は神奈川県横浜市泉区にある。平安末期から鎌倉時代の政治家。鎌倉幕府を樹立した源頼朝の妻で、二三代将軍の母。化粧井は神奈川県横浜市南区や保土ヶ谷区の街道筋に複数あり、地名由来、化粧料に基づく名称説がある。また旅人の喉を潤したという話(尼將軍化粧の水(前略))。この水が徳川時代に將軍の飲用水として使用された(中略)嘗て源頼朝の室尼將軍政子が此の地を過ぐるに当り、此の水を化粧に用ひたといふことである。或は又この辺の土地が政子に化粧料として与へられた土地であるとも云ひ、地名に御所台の称あるは是に基くものであると言ふて居る。(後略)『保土ヶ谷区郷土史 下』「第四部 特殊篇」磯貝正編、保土ヶ谷区郷土史刊行委員会刊、一九三八)は、三春の事例と共通する。
- (6) 鎌倉時代初期の遊女で曾我祐成の愛妾。大磯宿山下長者の娘とも伝わる。神奈川県大磯町の化粧坂に化粧井戸が残されている。
- (7) 岩手県奥州市に掃部長者の娘の身代わりになった松浦佐用姫、大分県白杵市に真名野長者の娘玉津姫の化粧井が伝わる。

(8) 『縮刷版日本昔話事典』(稲田浩二他編、弘文堂、一九九四)では「化粧井、化粧水、化粧石は多い。これが山中にある場合は、おそらく神に仕える女性が祭りの準備に山に籠った習俗による伝説の変化と考えられるであろう。化粧は、古くは厳粧と同義で、神に仕えるため的人格転換の行為であり、(中略)有名な女性に変えられて、史実らしく伝説化したものである。化粧坂の伝説には、長者伝説と結びついて

いるものが多く、その地方の豪族や宗家の祭りを代行した巫女の面影が偲ばれる」(渡辺昭五執筆)と説明する。他に『水の伝承 民間信仰にみる水神の諸相』(石上七鞘、新公論社、一九七九)等が挙げられる。

(9) 『白河風土記』巻二「郭外」

常宣寺(境内五十間裏三十間南百十八間北六十間)

町の南にあり浄土宗に山號を流水山と云ひ院號を正法院と云(中略)古昔當國石川郡石川小泉の城主大江雅致不例のことあり雅致の女和泉式部上東門院の上臈たりしが長久年中父の病を訪んが爲洛陽誓願寺の内佛彌陀の三尊惠心の作守本尊なれば持來りけるに其頃兵亂の御にて路塞り行き難ければ徑を求めて歸京のとき彼の本尊を末世結縁の爲に白川郡中野村硯石と云所に草庵を結び是を安置し一首の歌を

白河の關に此身は留めねと心は君か里へこそゆけ(後略)

『福島縣史料集成4』田子健吉編、福島縣史料集成刊行会刊、一九五三

(10) 吉田幸一「陸奥白河における和泉式部伝説と古跡―白河常宣寺本尊縁記―」『平安文学研究』79・80号、平安文学研究会編・刊、一九八八・十

(11) 「即今見中野旧跡、唯存大杉木三本耳、俗名」之称三尊杉、蓋有和泉式部化粧井者、則其近地名、云式部内也(漢文体縁起)、今之白川郡中野村硯石むらの間に草庵をむすひ、寓居したまひ、末

世の寄特あらんことを欲して、彼三尊を安置し奉り、ひとつの井をもとめ、朝夕の供水となしたまふ、此間伽井を今ハ和泉式部かつ倭歌を詠し、故郷におくりの今神に携る間幾もなうして都に帰らたまふ(本尊縁起画図詞書)。

(12) 『新編会津風土記』巻之九十五「陸奥國河沼郡之七」

●鹽坪村 ○山川 ○揚川 村西にあり、河井村の境内より來り、(中略)漆窪村の界に入る、(中略) 此川の岸村より九町計に遠面と云所あり、土人相傳て昔此所に櫻樹ありしが小野小町こ、を過し時

陸奥のうとか或は尾櫻と人とはは會津のそとのとほめて或はの里

●利田村 ○墳墓、○塚 村西一町二十間にあり、五輪高三尺餘、昔此村の者京夫にさ、れて上京し、小町がもとに渡夫を勤め三年にして歸郷しぬ、後星霜を経て一老女來り宿を假んと云、これを見れば小町が老衰せしなり、驚て家に請し、互に昔の物語して袖をしほりぬ、かくて數日滯留しけるに小町塚に染て身まかりしが、其骸を葬し所なりとて里人小町塚と稱すれども、かゝる上古のものとは見へず、此ほとりより文字ある石を得ることありといへば、一石一字の供養塚なるも知べからず

『大日本地誌大系33 新編会津風土記4』花見朔巳校訂、雄山閣、一九三三

(13) 依頼された利田村阿弥陀堂の西生坊の出自は不明。松原利田に入る手前に墓がある。

(14) 『利田村小町塚ノ縁起』(高郷村大字峯字利田 山口春夫家所蔵)

花の色はうつりにけりなと読おきし小町の君の旧跡は我が朝に處々にも有りとは言へども爰に蜷川の庄利田村に小野の小町の古塚あり其來由を尋れば出羽の郡司良實のむすめなりと歌書に有り(中略)又古今の序に小野の小町は古への衣通姫のながれなりあわれなるやうにてつよからずいわく能き女のなやめる所有るに似たりつよからぬは女の

年に三春城主田村清頭に嫁いだ際、城内に入る前に身づくろいし、この井戸を姿見にしたという説も聞いた。また昭和まで、農村部から野菜を城内に売りに来る農家が境界で身分を示す光景が見られたという。生産者から商人へと変身する意味をほらみ、越境にあたっての精神的・儀礼的な意味が捉えられるのではないか。

(18) 『庚申坂温泉由来』(『三春町史』9 近世資料2〔資料編3〕) 三春町編・刊、一九八一) 参照。

(19) 『天明三年凶作覚書』(「袖乞二出候者共非人小屋、泊り御助粥給候得共 命続兼候哉」) (『三春町史』9 近世資料2〔資料編3〕) 三春町編・刊、一九八一) 参照。

なお、「化粧」名称の地形と非人小屋の関係は、神奈川県大磯町の化粧坂や化粧井戸近くにも見られる(『東海道分間延絵図三 解説編』児玉幸多監修、東京美術、一九七八)。

(20) 『みはるの絵馬』三春町教育委員会編・刊、一九八一

遊郭では、節分の豆まきの際、しゃもじとすりこぎを持った遊女たちが一升枡で豆を撒く番頭の尻を叩くと、早く年季明けするといわれていたという(『三春町史』4 近代2〔通史編4〕) 三春町編・刊、一九七六)。

(22) 八隅蘆菴『旅行用心集』「道中心得二十ヶ条」に「一 旅舎の女、また八女郎をよびたてははふる、こと、よく、慎しむべきこと也。瘡毒(ばいどく)、湿気のうれひのみならず、旅中八つ、しみを第一とすることなれば、心に怠りあるときハ、物の破れこれより初まる。」とあるように、飯盛女がいる宿での感染症は注意喚起された(『生活の古典双書3 旅行用心集』今井金吾解説・注、八坂書房、一九七二)。

(23) 『三春町史』6 民俗』三春町編・刊、一九八〇

／『中世再考 列島の地域と社会』『講談社学術文庫』講談社、二〇〇〇

／『日本中世都市の世界』『ちくま学芸文庫』筑摩書房、二〇〇一

(25) 宮田登氏は、『白のフォークロア 原初的思考』(『平凡社ライブラリー』

宮田登、平凡社、一九九四)、『歴史の中で語られてこなかったことおんな・子供・老人からの「日本史」』(『新書V』網野善彦・宮田登(宮田知子)、洋泉社、二〇〇一)で、白には非日常への転入、再生の意味があると見出した。また内野花氏は、出産を白不浄と呼ぶことに、生死の境界を含む異空間・異時間において非日常の事物を指す色彩であると指摘する(『古代日本の出産における白色』日本医史学会講演、二〇〇九)。

【参考文献】

『日本女性史大辞典』金子幸子・黒田弘子・菅野則子・義江明子編、吉川弘文館、二〇〇八

『性のタブーのない日本』【集英社新書】橋本治、集英社、二〇一五

【謝意】

現地調査において、喜多方市教育委員会文化課ならびに文化財保護審議会、三春町歴史民俗資料館、三春昭進堂、白河市歴史民俗資料館、常宣寺を始め、多くの方にご協力を賜りました。多大なるご厚意に、記して感謝申し上げます。